

「シンデレラ」を 読み替えること

渋谷 真樹

テキストは全くのオリジナルとして生まれるのではなく、過去に蓄積されたテキストに応答して生まれる、と述べたのは、ミハイル・パフチンである。同時に、テキストは、その時代に支配的な言説の影響を受ける。すなわち、テキ

ストは、歴史的・社会的・文化的な声に呼応しながら、固有の位置を編み出していく。

そのことを示す好例が、「シンデレラ」の読み替えの系譜ではないだろうか。女性が自由に伴う責任に向き合えずに、保護し、世話をして

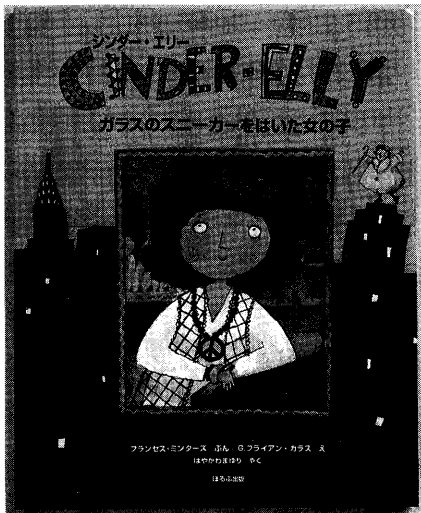
くれる男性を待ち望む現象を、コレット・ダウリングが「シンデレラ・コンプレックス」と名付けたのは、一九八〇年代前半のことである。

それ以後、シンデレラは、男女平等化を目指す時代に逆行する女性像の代名詞のように扱われ、このよく普及したおとぎ話を、現代風に書き替えようとする試みが続けられてきた。ここでは、アメリカで生まれ、近年、日本にも紹介された現代版シンデレラ・ストーリーを二つ紹介したい。

まずは、『シンダー・エリー——ガラスのスニーカーをはいた女の子——』である。この絵本の扉には、PCの文字とフェミニストのシンボル・マークが書きされた紙切れが、ぺたりと張り付けられている。フェミニストのシンボルは、話の中で、主人公のシンダー・エリーの胸にも輝いている。

PCとは、Politically Correct（政治的な適正さ）の略で、欧米を中心に盛り上がりを見せる、マイノリティ・グループを差別したり、

◀『シンダー・エリー——ガラスのスニーカーをはいた女の子——』フランセス・ミンスタース文
G・ブライアン・カラス絵 早川麻百合訳
ほるぶ出版 一九九六年

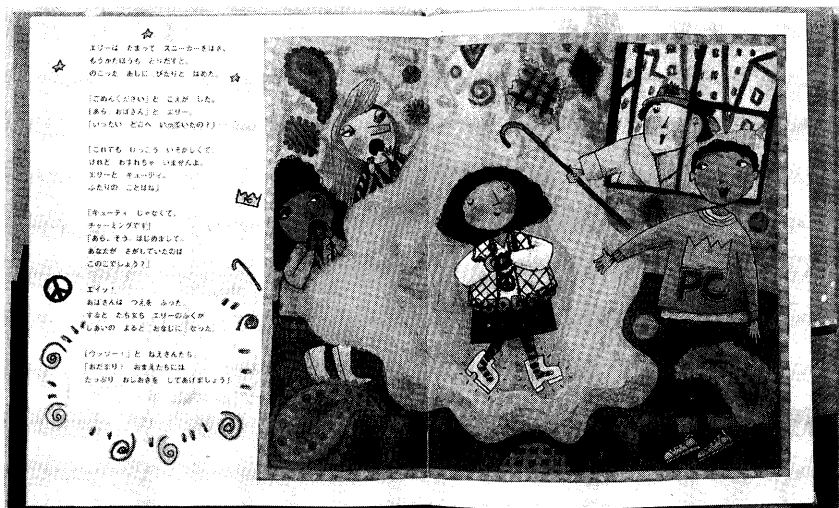


不快感を与えたりする表現を撤廃しようという運動を指す。さらに、PCは、エリーが最終的に結ばれることになるプリンス・チャーミングのインシヤルと一致する。

つまり、この作品は、フェミニストの少女が、政治的に正しい少年に出会い、救済される、現代の社会問題に敏感なシンデレラ・ストーリーというわけである。

この絵本の特徴は、なんといっても、ことごとく現代のニューヨーク風書き替えられた話の中の小道具にある。たとえば、エリーは、絹のドレスならぬポップなティーン・エイジ・ルックで決めている。エリーが招待されるのは、城の舞踏会ではなくバスケットボールの試合に、ガラスの靴はガラスのスニーカーに、様変わりしている。

また、話のあちこちで「なんてこった!」



▲エイッ! おばあさんはつえをふった。するとたちまちエリーのふくがしあいのよとおなじになった。

「いったい、どうするつもりだろう？」といった声が外から飛びこんできて、テキストの中に挿入され、あたかも多重放送を聞いているような気分させる。

さらに、画面には、スケッチブックや新聞紙、チケットが無造作に切り張りされ、落書き風のイラストがちりばめられて、キッチュな構成になっている。

こういった意味で、この作品は、非常に現代的な様相のシンデレラ・ストーリーに仕上がっている。けれども、服従に耐えた可憐な女性が、権力ある男性に見初められて幸運を掴む、というストーリーそのものは、不問に付されている。エリーが自由に街に飛び出していけるのは、名付け親の魔力で流行の服を手に入れた時であり、学校一の人気者のバスケットボール選手の愛情を得てようやく、姉達を見返すのであ

る。

このような、男性による女性の救済というストーリー自体を打ち壊し、改作したのが、『政治的に正しいおとぎ話』である。「シンデレラ」は、収められた十三編の昔話のパロディの中の一編である。PCの動きに関心を寄せる大人が読み、賛否両論を闘わせたベスト・セラーであるが、ティーン・エイジャーにも容易に読めるであろう。

この作品の中で、シンデレラは、「男どもが望む美のコンセプトに自分をはめこみたい」女性と捉えられている。「疑うことを知らないカイコから盗んだ絹」や、「働き者で無防備の貝から強奪した真珠」で自分を飾り立てた結果、彼女は、王子達に彼女を所有したいという過つた欲情を抱かせることに成功する。

王子とその男友達らは、シンデレラの所有権

をめぐって、「不道德的男性ホルモン」をむきだしにし、「破壊的マッチョダンス」を繰り広げ、ついには全滅してしまふ。

一方で、シンデレラは、十二時を過ぎると、美しいドレスもガラスの靴も失ってしまふ。しかし、彼女はむしろ、「非現実的に女性美の基準」からの解放を喜ぶ。それを見ていた女性達も、シンデレラにならって、「体をしめつけているものすべてをぬぎ捨て」、「女性のために着こちのいい、実用的な服」だけを製造するシンデレ・ウェア・ブランドを設立し、「だれにも依存せず、賢明なマーケティングをして」いつまでも幸せに暮らした、というストーリーである。

この話、まずは、中産階級の男性によって作られ、人々の生活の中で長い間温存され続けてきた家父長制や、女性蔑視・性差別、ヘテロセ

クシャル（異性愛）を排他的に支持する偏見などを、明快に転倒させた、と言っておこうか。

特に、この作品が日本で読まれる場合、まだまだ差別への認識と、それを撤廃しようという意識が低い日本社会の現実への反省がなくてはならない。PCやsexist（性差別論者）といった言葉は、しばしば単なる標語と化し、実体を失ってしまいがちだけれども、そのような言葉を持つことによって差別に敏感になることは、重要な第一歩である。

その一方で、周到に作り上げられた回りくどい言い回し——たとえば、「あの女性こそ、ぼくのプリンセスとして、祖先から受けついだ完全な遺伝子をはらむべき女性だ」という、シンデレラに対する王子の「賞賛」など——や、差別への過敏な反応は、容易に諧謔的な言葉の玩弄へと転化しうる。だから、この作品は、古典

的な物語を壊し、現代風に書き替える試みであると同時に、過熱化したアメリカでのPC運動を相対化し、笑いの対象にしてしまう試みとして受け止めることもできる。

▲『政治的に正しいおとぎ話』

ジェームズ・フィン・ガーナー 著

デープ・スペクター、田口佐紀子 訳

真野流監修 デイエイチシー 一九九五年



ここに挙げた二作は、共に、読んで閉じられてしまう物語ではなく、読者に声を出すことを要求する作品である。それらは、読者によって受動的に消費されるものではなく、読者の生活の中で生きられるのであり、新たなテキストの生産へと分かちがたく結び付いている。このような本に触発されて、子ども達が、伝統の名の下に無批判に受け継がれてきた「おとぎ話」を打ち砕き、自分達のストーリーを編み出して行くことを期待したい。個人が自分の経験の中から話をつむぎ出し、言説を多元化していくことが、権力の声に対抗していくひとつの手段であると思われるからだ。

(舞々同人)